

ハリソン・サグレーヴズ 2022/10/21

三方五湖の山頂にあるレインボーライン公園から四方の大陸、大海原、そして湖風景が展望できる。三方五湖という名前は、三方湖の辺りから見える合計五つの湖があるからであり、その他の四つは水月湖、菅湖、日向湖、そして久々子湖と呼ばれている。淡水、海水、とその二つが入り混じった汽水の三種類の水が東南側の五つの湖にあり、一番海に直接繋がっている日向湖と、一番離れている三方湖を除いて、全部の湖が汽水で、上記の通りの二つなら、前者は海水で、後者は淡水の水で出来上がっている。頂点にも綺麗に咲いている花庭園があり、かわいい浴衣のような衣装をまとっている二個の分厚い大石が宿っている神庫もある。

若狭三方縄文博物館では川と土の調査で縄文時代から現代へ渡る古日本について調べている内容がいくつか出展されている。土の中に積もれている物体や自然の廃棄物が定期的に川や湖の底へと流れ沈んで、その湖底を作っている層自体が昔の時代について語る。例えば、土と埋もれている枯れ木の質から、昔の人はどんな素材を使って生活をしていたのか、何の植物がその地に植わっていたのか（もしくは、縄文人はどんな植物を自分で育てていたのか）、そして、昔の住居民が何を食べ物としていたのかが掘り出せるものから調べられるのである。見つかった出土品の例から多様な種類の持つ土器が発見され、そのことから縄文人が昔ながらも土製の器具を作るのに適していて、作り自体から見ると結構こだわったパターンや湯気の換気に使用する穴と水口が見られる。縄文人が使っていた農業器具を見ると、栽培がその時代に手段として発覚され、それが人の座業を可能とした。博物館の外に構築された縄文時代で使われていた模型の家も居住生活を可能とした。藁の作りで暑い季節でも場を涼しくして、寒い冬の季節

でも火を焚けば場を温めるほどの熱を保てるように作られていた。焚いた火で収穫したナッツや木の実を家族で食べたり、客を招き入れて談笑したりもしたとされている。